

Contents

特集：ポスト小泉への透視図	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”A blow to Thai democracy” 「タイ民主主義への打撃」	7p
< From the Editor > 「衆院千葉7区補欠選挙」	8p

特集：ポスト小泉への透視図

永田メール問題で大荒れだった民主党は、4月7日に小沢一郎新代表を選出したことで印象を一新。4月23日の千葉7区補欠選挙に向けて挽回の攻勢をかけています。他方、小泉首相は4月6日に「戦後歴代3位」の長期政権となり、今月末には政権発足5周年を迎えます。しかし、残り任期は半年を切り、人々の関心はじょじょにそれ以後に向かいつつあるようです。

「今年の国内政治はどんでん返しが多い」という法則は、なおも健在です。「小泉首相なき自民党」にはどんな未来が待っているのでしょうか。あるいは二大政党のバランスは、今後どのように傾くのでしょうか。

「花の2001年組」を見舞う不運

かつてプロ野球界には、田淵幸一、山本浩二、星野仙一、山田久志、東尾修などのスター選手を輩出し、空前の大豊作となった「1968年ドラフト組」があった。将棋界には「花の昭和55年組」と呼ばれ、同年に四段に昇進した高橋道雄九段、南芳一九段、塚田泰明九段、中村修八段などが一時代を築いたことがある。少女漫画では「花の24年組」が有名で、萩尾望都、竹宮恵子、大島弓子、山岸涼子、樹村みのりなどがこれに属する。

この手の現象は、企業や役所でもめずらしくない。将来の有望社員や次官候補やらは、なぜか固まっていて、「花のXX年組」などと呼ばれたりする¹。政治家も同様で、初当選の年によって「XX年組」が得意やすい。

¹ 旧日商岩井株式会社では「ノーモア84」という言葉が有名だが、こちらは否定的な評価である。もっとも筆者を含む1984年入社組は、こう呼ばれることを喜んでいる傾向がある。

これを世界の指導者に当てはめると、「花の2001年組」があるようだ。2001年にトップの座に就いた政治家は、以下のように強烈な個性が目立つのだが、最近は揃って悲運に見舞われている。

○タクシン・シナワット(タイ首相)：2001年1月の総選挙で勝利し、数々の経済改革を推進。タイではめずらしいトップダウン型の政策運営で知られる。景気回復を成し遂げるも、政治腐敗問題により政権は迷走。2006年2月、首相批判の高まりを受けて下院を解散。4月、主要野党ボイコットのまま下院総選挙が行われ、与党がほぼ全議席を獲得するも、国王の「教育的指導」(?)によって下野を宣言。

○シルビオ・ベルルスコーニ(イタリア首相)：2001年5月の総選挙において中道右派が勝利し、第2次ベルルスコーニ内閣が発足。短命政権が多いイタリアにおいては、異例の戦後最長内閣。2006年2月11日に両院が解散され、4月9日及び10日に総選挙が行われたところ、僅差で野党連合が勝利し、票の数え直しを要求するなど見苦しいところを見せているが、どうやら政権の命運はきわまった模様。

○アリエル・シャロン(イスラエル首相)：イスラエルの元軍人で、パレスチナに対する最強硬派の政治家。右派政党リクードを率いて2001年に首相に就任。イスラエルの歴史上初めてパレスチナ国家の独立を明言し、中東和平前進に貢献する。その後は連立からの離脱が相次ぎ、2005年に新党カディマを立ち上げるも、道半ばにして脳卒中で倒れる。

3人揃って、非常に男くさい「同期の桜」といえよう。揃って豪腕タイプで、敵の多い政治家であり、大胆な仕事を残し、同時に物議も醸した。時に利あらず、今は3人ともに表舞台を去ろうとしているが、首相たるもの5年も務めれば十分に長いし、それぞれに一時代を画したと呼んでも差し支えないだろう。

ところで、日米トップのご両人も「花の2001年組」である。不思議なことに、タイプとしても上記3人と似ている。

○ジョージ・W・ブッシュ(米国大統領)：2000年選挙を制して、2001年1月に第43代大統領に就任。9/11同時多発テロ事件という国家的危機を乗り越え、アフガン戦線、イラク戦争を指導。2004年にはジョン・ケリー上院議員の挑戦を退けて再選される。しかし、イラク戦争の大義など、いくつもの疑惑から国民の批判が殺到。2006年現在、支持率は3割台となり、秋の中間選挙の見通しは不透明である。「2001年組の受難」のジンクスはしっかり当てはまる。

○小泉純一郎(日本国首相)：2001年4月の自民党総裁戦を制し、森首相の後を継いで首相に就任。「聖徳なき構造改革」「自民党をぶっ壊す」といったスローガンの下、道路公団民営化、不良債権処理、郵政民営化などに尽力。外交では対米協力を重視、日米の蜜月時代を演出する。電撃的な北朝鮮訪問によって拉致被害者を救出。他方、たび重なる靖国神社参拝によって対中関係を悪化させる。自民党総裁としての任期が切れる2006年9月の退任を表明している。

90年代と21世紀の大きな違い

こうしてみると、小泉首相だけが「花の2001年組」ジンクスとは無縁に、政権の安定を維持していることが分かる。4月6日、小泉政権の任期は中曽根首相の記録を抜いて戦後第3位となり、さらに4月24日には政権発足5周年を迎える。自民党総裁としての任期が切れる今年9月末に向けて、残り半年は文字通りの「ラストラン」となる。

議院内閣制においては、首相は多かれ少なかれ不満を抱きつつ退陣するものだが、こんな風に本人が納得する形でゴールを迎えるのは、1987年の中曽根首相退陣以来のこと。中曽根首相は政権末期に、売上税の導入に失敗して求心力が低下したが、残り半年は「ご祝儀相場」で支持率が上昇し、最後は後継者を「竹下、安倍、宮沢」の中から指名するほどであった。同じことが繰り返されるとしたら、小泉政権の残り半年も「安泰」ということになる。

さて、これを過去の歴代総理と比べると、驚くべき安定度である。頻繁に首相が入れ替わった90年代と21世紀に入ってからでは、まるで違う国のようだ。

歴代首相と選挙の関係

	首相	衆議院 選挙	参議院 選挙	統一地 方選挙	自民党 総裁選	民主党 代表選	ときの政局
1986	中曽根	X	X				衆参ダブルで自民大勝
1987	中曽根 竹下			X	X竹下		中曽根裁定で竹下後継
1988	竹下						
1989	宇野 海部		X		X海部		消費税&リクルート選挙
1990	海部	X					
1991	海部 宮沢			X	X宮沢		解散失敗で総辞職
1992	宮沢		X				
1993	宮沢 細川	X			X河野		55年体制の崩壊
1994	羽田 村山						
1995	村山		X	X	X橋本		
1996	橋本	X				(鳩山)	初の小選挙区選挙
1997	橋本				X橋本		
1998	橋本 小渕		X		X小渕	X菅	景気重視へ政策転換
1999	小渕			X	X小渕		
2000	小渕 森	X				X鳩山	密室の協議で森指名
2001	森 小泉		X		X小泉		小泉改革の始まり
2002	小泉					X菅	
2003	小泉	X		X	X小泉		マニフェスト選挙
2004	小泉		X			X岡田	年金問題
2005	小泉	X				X前原	郵政選挙で自民圧勝
2006	小泉 ?				X??	X小沢	「麻垣康三」の総裁選?
2007	?		X	X			

平成元年（1989年）から平成12年（2000年）までの間には、竹下首相から森首相まで実に10人もの首相が入れ替わった。当時はこれを「空白の10年」と呼んでいたわけだが、日本経済の長期低迷期とは、「不良債権処理問題をめぐって政治の迷走が続いた時期」であったことが今更ながら思い知らされる。

首相交代のペースはなぜ変わったか？

90年代の首相交代は、以下のようにイレギュラーなものが多かった。

平成になってからの首相の引き際

内閣不信任によるもの...宮沢内閣

首相の自発的な辞任...竹下内閣、細川内閣、村山内閣

党内事情による「詰め腹」...宇野内閣、海部内閣、羽田内閣、橋本内閣、森内閣

首相の死亡によるもの...小渕内閣

本来であれば、首相交代はなるべく選挙によって行われるべきであろう。密室の協議や不可解な辞任によって誕生する政権は、強い指導力を発揮することができないだけでなく、多くは短命に終わって政策の継続性を損なうことになる。その意味で、21世紀になってから日本政治の安定性が向上したことは、それ自体を評価することができるだろう。

それでは、90年代と現在の間にはどのような変化があったのか。2001年に行われた省庁再編や内閣機能の強化は、小泉政権の基盤強化にはある程度、役立ったのだろう。が、それだけが安定の理由であったとは考えにくい。

筆者の仮説は、国民の側に「期待の変化」が生じたのではないかというものだ。「制度」というものは、第一義的には法律や慣習によって構成されるものだが、より広範な意味では多数派の期待によって成り立っている。多くの人が「そういうものだ」と感じていることは、たとえ法的な担保がなくても十分に制度足り得る。

つまり国民の意識の中で、「首相のクビは簡単に替えられる」という常識が過去のものとなり、代わりに「首相は総選挙や党内選挙によって替わる」ことが定着しつつあるのではないか。だとすれば、これは永田町のルールが変化したことを意味することになる。

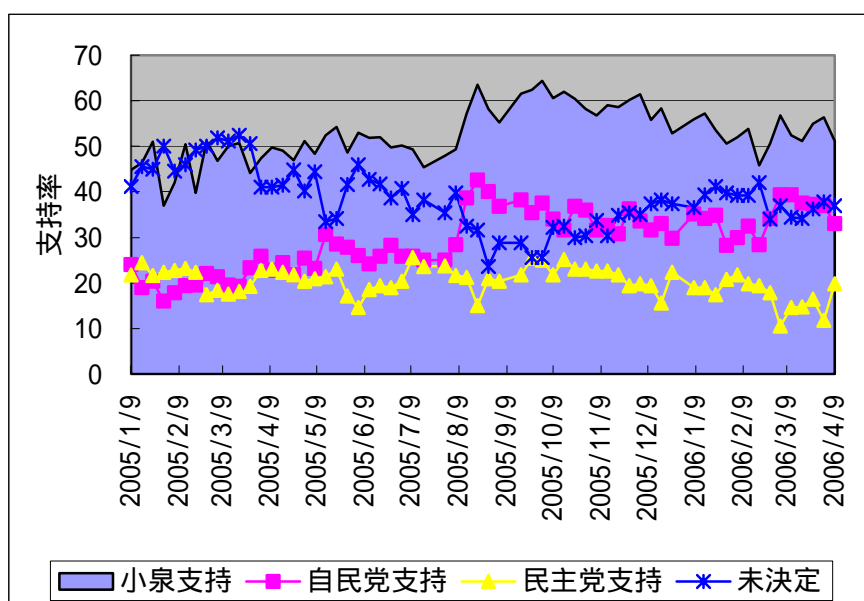
想像しにくい「小泉後」の政局

こうしたルールの変化は、永田町のインサイダーにはかえって見えにくいのかもかもしれない。例えば「ポスト小泉」について、消息筋の間では「小泉首相の任期延長説」や「小泉氏による新党結成説」などが飛び交っている。これらは典型的な過去のルールに基づく発想ではないだろうか。

逆に「首相は選挙で決まる」ことを前提とすれば、次期首相は国民的な人気の高い「安倍官房長官で決まり」となる。自民党の一般黨員票が世論調査とほぼ同じ投票行動を示すことは、過去2回の自民党総裁選挙が示すところである。とはいえ、それでは政局を予想したことにはならないし、結論としても素直には信じにくい。とどのつまり、「10月以後の日本政治」については、明確な見通しを持っている人がいないのである。

もちろん本誌としても、特段の見識があるわけではない。そこでいつもの手法で、フジテレビ「報道2001」の調査結果をもとに、支持率の推移を元に今後の展開を考えてみたい。

「小泉&自民&民主」の支持率²



2005年9月の総選挙を挟んで、「分水嶺」のようなものが出来ていることが確認できよう。そこで今度は、「9/11総選挙」の前後で、各種の数値の平均がどう変化したかを比較してみる。

支持率グラフ、「9/11」を挟んだ変化

	小泉支持	自民党支持	民主党支持	未決定	自民 - 民主	小泉 - 自民
平均	53.6	29.9	20.6	39.2	9.3	23.7
9/11以前	51.1	26.2	21.4	42.9	4.8	24.9
9/11以後	58.4	35.4	20.4	36.3	14.9	23.1
その差	+7.3	+9.2	-1.0	-6.6	+10.1	-1.8

² http://www.fujitv.co.jp/b_hp/2001/chousa/chousa.html

10月以降は状況が一変？

ここから分かるのは以下のような事実である。

* 民主党支持は2割前後で安定している。

「永田メール問題」で騒がれた今年3月分を「異常値」と考えると、実は民主党の支持率はほぼ2割程度で推移しており、ほとんど変化していない。

* 「9/11総選挙」を契機に、「未決定」有権者の7%程度が自民支持に転じた。

自民党が新たな支持層を獲得した形である。結果として、自民党の民主党に対するリードは5%から15%に拡大した。

* 他方、「小泉支持だけど自民不支持」という層はコンスタントに23%もいる。

これが「小泉自民党ファン」である。彼らは「9/11総選挙」にかかわらず、一貫して「小泉イエス、自民党ノー」の態度をとっている。

物事を単純化してしまうと、現在の政党支持は「自民35%、民主20%、その他10%、未定35%」である。そして「小泉さんは支持するが、自民党は支持しない」という層が23%程度いて、彼らは「未定」35%の中に隠れている。その結果、小泉政権の支持率は6割近くなる。では「小泉自民党ファン」は、今年10月以降、どんな投票行動をとるのだろうか。

仮に「小泉自民党ファン」23%のうち、10%程度が民主党支持に向かったとすれば、政党支持率は「自民35%、民主30%、その他10%、未定25%」となり、いきなり政権交代の可能性が出てくる。ということは、「小泉自民党ファン」の票をどの政党が吸収するかということが、今年10月以降の焦点になってくる。

自民党内では、本誌が命名するところの「ネオ自民党」勢力を中心に、「小泉改革の継続」を強調する声が強い。これは小泉政治を継承することで、「小泉自民党ファン」を手放さないようにする狙いがあるのだろう。しかし、「小泉抜きの小泉改革」にどの程度の支持が集まるかは不透明である。「小泉自民党ファン」とは、政治家・小泉純一郎の政策が好きというよりも、むしろ政治スタイルが気に入っているように見えるからだ。となれば、やはり彼らは10月以降、普通の無党派層に戻る可能性が高い。

一部では、「民主党の小沢新代表は、政界再編を仕掛けてくる」といった報道がなされている。これも多分に「永田町の古いルール」に沿った発想であるように思える。すでに300選挙区のほとんどに自民党と民主党の候補者が決まっており、二大政党の基盤はかなり強固になっている。「政策の幅が広過ぎる」という批判も、米国の共和党と民主党を考えれば、現状程度は十分に許容範囲であろう。

おそらく二大政党の枠組みは、現状のままで定着するのではないか。新しくなった「国民の期待」も、それを当然と捉えていると思うのである。

< 今週の”The Economist”誌から >

”A blow to Thai democracy”

「タイ民主主義への打撃」

Cover story

April 8th 2006

* タイの政変に対し、”The Economist”誌がいかにも西側メディアらしい「お説教」をしています。お説はごもっとも。でもちょっと違うような気がします。

< 要旨 >

1990年、サッチャーは選挙によらず、党内の力で引き摺り下ろされた。同様に2001年からタイの首相であるタクシンは、3回立て続けに選挙を勝ったがその座を去ることとなった。

4月2日の選挙を主要野党はボイコットした。その結果、選挙は信認投票の様相を呈し、投票率は57%になったが、1年前に比べると得票は300万票も減った。そして反対勢力はデモ活動を継続し、交通と官業を麻痺させた。国王との謁見の後、タクシンは退陣を表明した。

タクシンは好ましからざる人物であり、金で権力を得た億万長者であり、自らのメディア会社を利用して来た。その点で、イタリアのベルルスコーニ首相と似ている。両者はともに富豪であり、憲法を顧みず、批判を抑圧している。敏腕経営者を自称しつつも、政権運営に失敗している。二人とも民主主義にとって害悪であり、居なくなった方が国のためであると。

が、ベルルスコーニがイタリアの総選挙で57%を得票すれば、プロディと野党勢力が首相を官邸から追い出すことはないだろう。タクシンは暴動への恐怖、軍介入の可能性、王室の圧力などの理由で辞任したらしいが、真の民主主義国として健全なことではない。

タクシンは繁栄から取り残された地方の貧困層に注力し、彼らは選挙で熱狂的にタクシンに投票した。中国と輸出市場で競争しているタイにおいて、内需の振興は重要であった。タイの政治は、反対勢力たちが言うほどには悪くはない。タクシンは事業のほとんどを、テレビ局も含めてこの1月に売却した。タクシンを止めさせるのは、選挙によるべきであった。

東アジアの多くは貧しい時代の陰を背負っており、民主主義の歴史は浅い。地方で高い人気を持ち、選挙で選ばれた指導者を、都市部のエリートたちが追放するのは危険である。近くはフィリピンで、軍の支持を受けた都市部の革命がエストラダ大統領を追放した。後を継いだアロヨ大統領は、「ピープルパワー」に中毒した国を受け継いだ。タイが同様な不安定のサイクルに陥った場合、インドネシアのように脆弱な未来を懸念しなければならない。

タイの「革命」は行儀がよく、流血もなかった。バンコクの間層は分別があり、クーデターには踏み込まなかった。1973年と92年の流血体験は今も記憶に新しい。

「独裁者」が表舞台を去った後は、双方の成熟度が求められる。タクシンは介入を避け、反対勢力はすみやかに民主的な手法に戻るべきだ。新しい選挙が行なわれ、すべての政党が参加することが肝要である。その場合、タクシンの政党が再び与党となり、政府を組織することもあり得るが、野党は結果を受け入れるべきだろう。それが民主主義というものである。

< From the Editor > 衆院千葉7区補欠選挙

4月11日、会社を休んで、千葉7区補欠選挙における「さいとう健候補」の出陣式に行ってきました。選挙権があるわけでもないし、行ってどうなるものでもないんですが、自分の友人がご近所から出馬するとなると、気になって仕方がないもので。

選挙事務所が置かれているのは、東武野田線江戸川台駅で、筆者の自宅から Door to Door で30分。「夢館」というラーメン屋があるちょっと手前。ちなみにこの店は、煮干だしの深みと、煮卵のうまさに定評があり、柏市内に「夢館」の支店が出来るまでは、家族でよく食べに行ったものです。で、選挙事務所は以前、スーパーマーケットだった建物2階分を丸々使っており、それが人で一杯になるという盛況さでした。

武部幹事長、深谷隆司衆議院議員などの応援演説があって、公明党の冬柴幹事長も来ていて、なんと豪華な出陣式。でも「残念ながら出遅れている」(武部幹事長)。永田メール問題が騒がれている間は楽勝ムードでしたが、「小沢新代表効果」で状況は一変。自民党は補欠選挙ではこれまで5連勝だけれど、それは投票率が低かったから。今回は全国でただひとつの補欠選挙に注目が集まっており、投票率が上がればそこは「千葉都民」が多い常磐線沿線なので、どんな風が吹くか分からない。

さいとう健さんとは、ワシントン時代からの付き合いなので、もう15年以上。心から尊敬できる同世代人であり、当然、圧勝してほしいし、本人の良さは会えば誰でも分かってもらえると思います。それでも、そこは選挙だから何が起きるか分からない。しかも補欠選挙には、重複立候補の保険がない。文字通り、勝つか負けるか。国家公務員の身分保障も捨ててしまって、大丈夫かいな。本人と握手して、奥様と立ち話したら、ああ、なんて大変なことを始めちゃったんだろうと思ってしまいました。

明日は小泉首相が地元に入ります。小泉さんにとっても最後の応援演説でしょうから、聞きに行ってみようと思います。それにしても、「選挙の怖さ」をひしひしと感じる補欠選挙です。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com